

母はとても優しい人で、私が小さいときから、常に「心の栄養」を与えてくれました。心の栄養とは、心理学で「無条件の肯定的関心」といい、相手の良いところも、そうでないところもすべて無条件に受け入れていく姿勢をいいます。

私が話しかけると、母は何をしても手を止めて、必ず私の目を見て話を聞いてくれました。失敗をしたときも、「よかよか」と笑いながら、「次はどうするの？」と、優しく語りかけてくれました。おかげで「私は愛されている」「必要とされている存在なのだ」と、自分を肯定できる強い心ができたように思います。

その後、日本航空の国際線キャビンアテンダントとなり、結婚をして3人の子どもを授かりましたが、理由（わけ）あって、子どもたちを置いて実家に戻りました。家庭裁判所に子どもたちの親権獲得の相談をしても、だれも私を応援してくれる人はいませんでした。落ち込む日々が続き、実家を出て福岡で仕事を始めました。

1年後、学習塾をやろうと決心して、当然反対されるだろうと思って母に相談すると、母は「そうね。あんたなら大丈夫。私が応援するよ」と背中を押してくれました。だれにも相談できず、悩み苦しみ、心細かった私が、「母さんありがとう。頑張るからね」と、希望に燃えたあの日のことは今もはつきりと覚えています。

以来26年にわたり、「松陰塾」で、たくさんの子どもたちにも心の栄養を注いできました。今は塾の菅ママとして、お母さんたちからのさまざまな相談にも応じています。「子どもがなかなか勉強しただらない。どうしたらよいの?」「成績が伸び悩んでいるのはなぜ?」と、どのお母さんも真剣です。

しかし、心配はいりません。私が母の一言で絶望の淵から立ち上がることができたように、お母さんの笑顔の声かけ一つで、子どもはいくらでも力を発揮することができます。だからといって、いつもニコニコ笑顔でいましょうというわけではありません。子どもが「お母さ〜ん」と声をかけてきたら、子どもの目を見て、「は〜い、〇〇ちゃんなくに?」、子どもがブスツとした顔をしていたら、「あ〜ら、何かあった?」と応える。これぐらいの大らかさがあれば十分です。本書のタイトル「それでい〜と!」は、博多弁で「それでいいよ」という意味です。

子どもが失敗や挫折を経験しても、すべてを受け入れ、「それでい〜と！大丈夫」「あなたならできる」と、前向きな言葉を伝えていけば、それが子どもの「心の栄養」となり、やがて自信に満ちあふれ、自ら考え、行動できる力を身に付けていきます。これこそが21世紀を生きる子どもたちに今、求められている力であり、私たち松陰塾が目指しているものです。

では、どうしたら子どもが自ら考え、行動できるようになるのでしょうか。本書では、子どもの10年後、20年後をイメージしながら、日ごろからお母さんが子どもにどのように接していけばよいのか、実際に寄せられた相談事例をもとに、具体的な声かけの方法や「シヨウイン式」学習法などを紹介しています。「どんなことがあっても、私はあなたの味方よ」と、お母さんには子どもの応援団長であってほしい。そう願って筆をとりました。

私は常々お母さんの応援団長でありたいと思っています。子育てに正解はありません。それだけにだれもが子育てに悩みます。ぜひ笑顔の声かけを実践していただき、お母さん自身が子どもの将来に自信と希望を持って、子育てを楽しんでいただけたらと思います。